

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その6 モナークバタフライ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

私が滞在しているペンシルベニア州の中部は、北緯40度ぐらいなので青森県あたりに相当する。やってきた5月初頭はまだ寒い日も多く、みぞれが降ったこともあった。6月に入っても暖かくなったり寒さがぶり返したりで、春の花は見られても昆虫も少なく、このまま夏は来ないのではないかとまで思うことも…。またこちらの大学のキャンパス内や、住宅地および広い公園は、基本的に地面は芝生で覆われており、それはそれで美しいのだが、植生が単純で草花というものがほとんど生えていない不思議な空間ができあがっている。このため近所でチョウやハチが見られるような場所はないと言っても過言ではなく、近場の昆虫撮影はどうしようかと悩んでいた…。

しかし6月のある日、自宅の隣の公園の一角だけは様々な種類の樹木や草花が植栽されていることを発見し、まさに歓喜した。バタフライガーデンとなっているその一角は大学もかかわる組織が管理し、植物の多様性を維持してチョウや土着の花粉媒介昆虫を保護しようという、私にとっては願ってもない場所だった。さっそく足繁く通い、管理している人たちとも知り合いになり、彼らの仲間に入れてもらうこともできた。管理しているMaster Gardenerという人たちは、年配者が多いが明るく自然を愛する人たちなので、様々な話をすることができて、大学の研究室以外でも居場所を見つけた私は、充

実した時を過ごしている。

さて、こちらに来て撮影したいチョウに、モナークバタフライと呼ばれるオオカバマダラがいる。長距離移動することで有名なこのチョウは、果たしてこの地にも現れるのだろうか？こればかりは北上してくるのを待つしかないが、ガーデンの人たちが毎年見られる、というので安心してた。そして6月下旬以降、一気に咲き始めた初夏の花に、発生した多くの昆虫たちが訪れる光景が見られ、そんなに広くない一角ではあるが、この地にもやってくることを確信した。

とうとう7月下旬、彼らはやってきた(図-1)。幼虫時代の食草トウワタ Milkweed のために体内に毒を保持し、鳥などに捕食されない彼らは、翅の痛みも少なく、優雅に飛ぶ姿は見えていて惚れ惚れするし、気品があり存在感があった。大型でオレンジ色だがけっして派手ではないこのチョウが、なぜアメリカを代表するチョウになっているのかが、わかるような気がした。

そしてガーデン内にたくさん植えられているトウワタには幼虫も発生し、一度見てみたかった姿を撮影することもできた(図-2)。こうしてオオカバマダラの実物を見ることができると、今度は秋に羽化した成虫が南に長距離移動し、集団で越冬する地域での撮影もしたくなる…。何を見てもさらなる撮影意欲が湧いてしまうのであった。



図-1 吸蜜するオオカバマダラ



図-2 オオカバマダラの幼虫